

「一緒に『里』を再建しよう」

内山 節

本紙面を借りて、被災者の皆様にお見舞い申し上げるとともに、亡くなられた方々に心からの哀悼の意をさせていただきます。

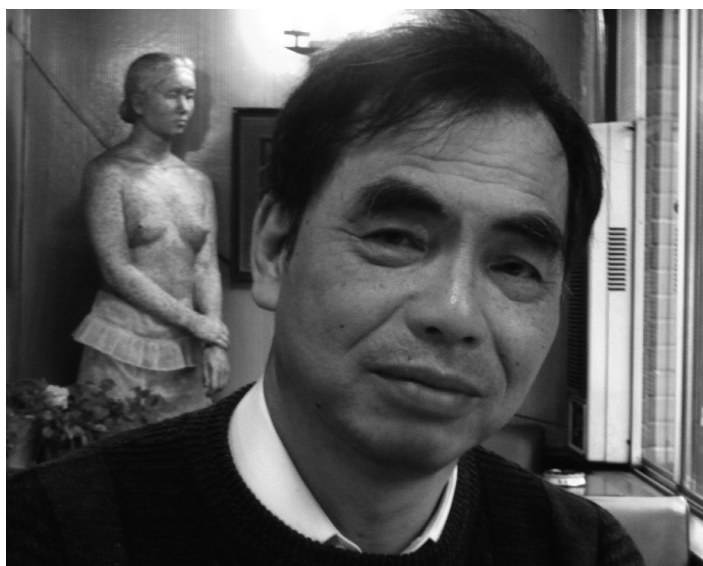
三月十一日の地震と津波は、私たちに大きな恐怖を与えた。誰もが言葉を失ったことだろう。その思いはやがて被災地域に暮らす知り合いへの心配へと変わり、つづいて自分は何をすべきなのかを考えた。誰もがそうだった。

その後、福島原子力発電所が瓦解の危機を迎えていることを知る。関東、東北の広大な地域が、崩壊の危機に直面していたのである。

この事態は、私たちは危機を内包した社会のなかで暮らしていることに気づかせた。われわれは危機のすぐ横で暮らしていたのである。とすると危機とは何なのか。

私は危機とはシステムが崩壊することなのだと思う。労働や暮らしのシステムが崩壊したとき、私たちは危機を迎える。大きな地震や津波は一瞬にしてそれを破壊する。

だが現代の危機はそれだけによっておこるわけではない。なぜなら今日の私たちは、さまざまな大きなシステムに依存しながら暮らしているからである。そしてこの大きなシステムが瓦解するとき、



□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□

私たちの労働や暮らしも危機に直面する。

福島原子力発電所というシステムが破綻したとき、それは東京電力の電力供給システムの崩壊へと連鎖した。そのことが電気不足による鉄道システムの動揺を

つた。交通システムも、通信システムや物流システムも、電気を含むエネルギーの供給システムも、さらには行政システムも一瞬にして崩壊し、生き残った人々も生きていくすべての土台を失った。原子力発電所に近い地域でも同じことが進行した。たとえ津波による直接的な被害を受けていなかったとしても、原発の瓦解が、この地域のすべてのシステムをためてしまった。

現代社会の危機は、システム崩壊の連鎖がおこることによって発生する。

ところでシステムとはある想定にもとづいてつくられたものだということ意識しておかなければいけない。福島原発も想定された地震に対しては、たとえこの原発に構造上の欠陥があることが以前から指摘されていたとしても、システム維持の対策が立てられていた。ところがその想定を越えた瞬間にシステムは崩壊したのである。システムとはそういうもので、それはたとえば年金システムでも人口が増え続ける、経済成長がつづくという想定の上に組み立てられているのであり、だからこの想定が狂った瞬間に

生み、さらには工場の生産システムにも

大きな打撃を与えた。こうして地震や津波の直接的な影響がなかった地域でも、システム崩壊の連鎖がおこったのである。津波の被災地ではそれはもっと深刻だ

年金システムの危機が現れてしまう。

システムは想定を越える事態が発生したとき、システム崩壊を起こす運命にあるのである。しかも前記したように、ひとつのシステム崩壊は別のシステムをも壊し、システム崩壊の連鎖を生みだしてしまう。ところがこのようなシステム崩壊がおこったとき、それに対する対処能力がシステムの側でない、という問題が発生する。なぜならこのような社会では、想定範囲内でひとつのシステムが他のシステムを支えるという構造が作りだされていて、いわばシステムの相互依存性が確立されてしまっているからである。ひとつのシステム崩壊を他のシステムが補うというかたちにはなっていない。国の政治というシステムもこのなかにあって、ゆえに今回の大震災のなかでも示されているように、国もまた十分な働きをすることができなくなってしまう。さらにはなおも自分たちのシステムの維持を第一に考えている東電の人たちの見苦しさは、不快でしかなかった。とすると、この事態に対応できるものは何なのだろうか。

それは助け合おう、支え合おうとする人々の思いと行動である。

実際、今日の日本の人々は極めて冷静に強靱な頑張りを見せている。被災者の人たちは、茫然自失の状態から素早く支え合う態勢づくりに向かっているし、ほとんどの人たちが被災者を支えたいと思っている。都市部では不安に駆られた行動も、大きな買い占めもおきていない。確かに一部の商品がなくなるとい現象はあったが、私の知るかぎりそれは次により大きな地震などがあつたときにも、

自分が素早く他者を助けられるようにするために、つまり自分を身軽にしておくために数日分の必要なものを確保しておくとか、被災した知り合いに送るための購入であつて、パニック的な買い占めはなかった。

この精神は被災地で道路や店の復旧の活動をしている人や原発の危機を食い止めようと自己犠牲的に労働を提供している人たちにも共通しているように思う。彼らもまた業務で仕事をしているというより、自分の労働によつてこの社会を支えようとしているのである。それは被災地の現場で働いているすべての人にもいえるし、もちろんボランティアの人たちの精神でもある。私の周りでもすでに幾つもの救援活動や義援金集めがはじまっているが、誰もが支え合う社会の一員でいようとしているかのようである。

システム崩壊の連鎖がおきたとき、それを克服していく力はシステムの側にはなく、支え合い結び合おうとする人々の思いと行動のなかにある。

もちろんこれから大規模の復旧工事などがおこなわれていくときには、行政システムなどが動く必要性は生まれるだろう。交通システムや通信システムなども復旧させていかなければならない。だがそれらが復旧すれば、被災地の社会が復興するわけではない。この町を再建しよう、ここに共同の生きる世界をつくりだそう、そして結び合い、支え合おうという行動こそが、さらにこの活動を支援しようとする多くの人々の活動が社会を再建させるのであり、システムの再建はそのための道具にすぎない。ところで私自身は、東日本大震災の詳細

報を滞在先のフランスで知った。フランスでも人々は地震と津波のすさまじさに怯えた。それから二、三日が過ぎると福島原発の現実に対する恐怖が広がった。核分裂の暴走がはじまる可能性があるだけに、それは当然のことでもあった。とともにその報道の隙間からは、日本駐在員の報告というかたちで、日本の人たちが驚くべき冷静さと助け合いの精神でこの事態に対応しているという現実が伝えられていた。そして帰国後私自身も、自分の周りでも数多くの救援活動がはじまっていることを知った。

今回の大災害は日本の社会を変えていくことになるだろう。巨大なシステムに依存した社会に対する反省も広がるだろう。原子力発電所で町づくりなどという声は、もうでてこなくなるだろう。エネルギーの自律という意味を、国のレベルではなく地域から考えていこうという動きも生まれるだろう。平成の大合併が危機への対応力を弱めているのではないかという反省もでてくるだろう。裸の個人の時代から結び合った個人の時代へと、私たちの社会はいっそう舵を切っていくだろう。地域の自律は外の人たちとの結びつきをなかで実現するという確信も定着していくだろう。当たり前の生活の大事さの再認識は、家族の結びつきをもう一度取り戻させるかもしれない。システム崩壊の連鎖がおきたときなすすべをもたない大都市から、人々は少しづつ離れていくだろう。他者のためになる生き方、他者のためになる労働を模索する動きも加速度をつけていくだろう。それは日本の社会の大きな再建運動になるかもしれない。被災地の復興だけを

論じるのではなく、日本の再建のなかで被災地を復興していくことが求められているのだということを、多くの人たちは感じているはずだからである。そうしたければ、東日本大震災で命を失った人たちに申し訳ない。亡くなった人々は、そのことを私たちに教えるために命をささげたのだと思わなければ、私たちは亡くなった人々たちを供養することもできない。システムでガチガチになった社会は、折れたときに破滅的な事態をもたらす。私たちはこれから、もっと柔らかな社会をつくっていかなければいけない。人の温かさが感じられるような社会を、自分の温かさが他者に届けられるような社会を、である。そういう結び合いのなかで、都市と農山漁村も連携していかないと、都市も農山漁村も自律することはできないだろう。

日本の社会全体を大きくつくりなおすのだという意識をもちながら、そしてそれでもなお自然とともに生きるのだという意志を明確にしなから、私も歩んでいきたいと思う。

「かがり火」の読者、支局長の方々のなかにも、東日本大震災で被災された方が多数おられるだろうと思います。「森は海の恋人」の活動で知られている私の友人、宮城県気仙沼市唐桑町の畠山重篤さんもお母様が亡くなられ、家以外のすべてのものを失われました。幾度かおじやました福島県飯館町は原発事故の被害を受けています。他にも気がかりな人たちがたくさんいます。皆様、一緒に頑張りましょう。